

看護学部の学生との協同による防災ガイドブック作成活動報告

林 和枝、近藤裕子、臼田成之、菊地亜矢子*、
中川名帆子、西村淳子**、谷口恵美子

Report on Creating a Disaster Prevention Guidebook with Nursing Students

Kazue HAYASHI*, **Yuko KONDO***, **Nariyuki USUDA***,
Ayako KIKUCHI**, **Nahoko NAKAGAWA***,
Junko NISHIMURA***, **Emiko TANIGUCHI***

キーワード：防災ガイドブック、看護学生、防災教育

はじめに

1972年に設立された岐阜聖徳学園大学(以下、本学とする)では、2015年4月より羽島キャンパスに看護学部を設置し、新設の建物(以下、9号館とする)にて看護教育を開始した。

近年、我が国では、地震や火山災害、台風や集中豪雨による水害など多くの自然災害が起きている。特に本学が位置する中部地方においては、東南海地震発生の切迫性が指摘されている。また、本学羽島キャンパスは木曾川と長良川に挟まれた場所に位置しており、水害の起きやすい地域でもある。そのため、学生は、災害の種類に応じて安全な避難行動がとれることが求められる。しかし、本学看護学部の学生は約半数が岐阜県外より通学しており、大学近辺にひとり暮らしをしている学生も少なくない。そのため、新しい環境で生活するにあたっての危機管理として、岐阜県内で被災した場合の対処方法(通学中の対処や避難場所の把握、土地柄によ

る災害の傾向と対策・対処など)と、学内で被災した場合の対処方法(避難方法と避難場所の把握、帰宅手段の確保など)の把握は必須といえる。

これらのことから、本学看護学部では、学生の防災意識向上と被災時の対処方法の習得が急務であると考え、初年次より看護学部の教員による防災関連ワーキングを立ち上げ、看護学部学生に対する防災教育のあり方を検討することとなった。初年次の活動として、2015年7月に2015年度入学生を対象に、防災に関するセミナー(以下、防災セミナーとする)を実施するとともに、学生の防災に対する意識調査を行った。その結果、学生は被災経験が少なく、かつ災害による危険性をあまり感じていないこと、備蓄品の準備や家族との連絡手段の取り決めなど、災害時の準備を行っていないことが示された(林ら、2016)。

本学では学生、教職員を対象に、年に一度、

岐阜聖徳学園大学 Gifu Shotoku Gakuen University

* 元岐阜聖徳学園大学 Former Gifu Shotoku Gakuen University

** 元日本赤十字豊田看護大学 Former Japanese Red Cross Toyota College of Nursing

防災総合訓練を実施している。しかし、学生が被災時に使用する大学独自のマニュアルやガイドブックなどは存在しない。先に述べた防災に対する意識調査(林ら, 2016)において、学生に防災に関する学内のガイドブック(以下、防災ガイドブックとする)が必要だと思うか尋ねたところ、「必要である」と回答した学生が95%を超えていた。このように防災ガイドブックの作成・配布に対する学生の要請は非常に高く、早急に防災ガイドブックを作成することが必要であるという結果が得られた。

看護系の大学および専門学校における防災マニュアルの作成に関する先行研究は、非常に数が少ない。平野ら(2006)は、2004年7月新潟・福島豪雨を契機として、学内外における危機管理マニュアルの作成を試みているが、マニュアルの作成者と使用者は、ともに教員である。実習中に被災した際の対応マニュアルに関する先行研究は、増田ら(2005)の神奈川県内の看護専門学校9校が協同して作成した災害時行動マニュアルに関する報告と、上田ら(2013)の学生が自律的に行動するための災害時マニュアル作成の報告の2件がある。これらの報告は、実習中に被災した際にマニュアルで取り決めた行動を、学生が実践するために作成されたものであるが、いずれのマニュアルも作成者は教員である。学生用の災害時のガイドブックやマニュアルが、最も効果的に使用されるためには、使用する学生の視点に立ち、生活様式に合った項目や内容で作成することが重要であると考えられる。

以上の結果を受け、防災関連ワーキングでは、看護学部の学生と教員が協同し、学生の意見を取り入れた被災時に活用可能な防災ガイドブックの作成に取り組むこととなった。本論文では、その活動について報告する。

I. 目的

防災関連ワーキングの活動の一環として、看護学部の学生と教員が協同し、学生にとって実用的かつ活用可能な防災ガイドブックを作成する。

II. 方法

1. 学生の防災ガイドブック作成参加メンバー募集

(1) 対象

本学看護学部2015年度入学生。

(2) 募集時期

2015年7月

(3) 募集方法

学生の防災ガイドブック作成参加の募集は、2015年7月に実施した防災セミナー時に行った。防災ガイドブックの作成目的や活用方法、作成活動の日程などについて、参加者募集説明文を用いて説明し、学生に協力を求めた。参加意思のある学生は、所定用紙に氏名と任意で連絡先を記入し、防災セミナー終了1週間後までに指定のレポートボックスに投入するよう説明をした。

2. 倫理的配慮

学生への本活動参加における倫理的配慮に関する説明は、防災セミナー時に行った。研究目的、趣旨、活動内容、参加者のプライバシーの保護、防災ガイドブック作成活動の参加は、学生の自由意思によるものであること、活動に参加することによる利益・不利益、ならびに本活動は研究として報告することなどを明記した説明文を配付し、説明した。

さらに、参加の意思表示のあった学生には、初回の防災ガイドブック作成活動時に説明文を配付し、再度、上記の内容について説明を行い、同意書の記名によって了承を得た。

なお、本活動に先立ち所属大学の倫理審査会の承認を得て実施した(承認番号:2015-6)。

III. 作成活動内容

1. 防災ガイドブック作成活動メンバー

3名の学生から防災ガイドブック作成の参加希望があり、防災関連ワーキング所属の看護学部教員7名とともに活動を行った(以下、防災ガイドブック作成に参加した学生3名を学生メンバー、教員7名を教員メンバー、学生・教員の両者を活動メンバーとする)。学生メンバー

の参加理由は、本学の防災に関する講義（教養基礎科目「災害と危機管理」）を受講しており関心があった、震災の写真を見て防災や減災に関心を持った、防災に関心があり、さらに他学生から誘われたなどであった。

2. 防災ガイドブック作成活動期間

2015年9月～2016年1月

3. 防災ガイドブック作成活動計画および方針

活動は週1回、1～2時間程度で、全12回を計画した。次の活動内容および日程は、活動終了時に決定した。活動日の決定は、活動メンバーが多数出席できるように調整をした。ただし、出欠席は個人の予定や意思を尊重し、自由参加とした。活動時の司会進行は教員メンバーが行ったが、学生と教員が立場や職位など関係なく、自由に発言し、活動内容が決定できるように配慮した。

4. 各回の活動内容

第1回

学生メンバー3名に、文書を用いて本活動における倫理的配慮の説明を行い、同意書に記名を持って活動に対する同意を得た。また、活動メンバーの自己紹介と本活動への参加理由を語り合った。活動方針の説明と全12回の活動ス

ケジュールの確認を行った。

第2回

防災ガイドブックに掲載する項目を考える資料として、また活動に対する意欲の向上および活動メンバーの関係形成を目的とし、「防災カードゲームシャッフル（株式会社幻冬舎エデュケーション，2014）」を用いて、防災知識や応急手当などを学んだ。ゲームを通して、防災ガイドブックの作成にあたっては、限られた紙面の中で読み手が正しく理解できる表現を用いること、内容は要点をわかりやすく記載することが重要であるとの共通理解を得た。

第3回

防災ガイドブックで取り上げる内容を明確にするため、付箋紙を用いたブレインストーミング法でグループ化し、項目抽出を行った。その結果、『おはしも行動マニュアル(被災時の初期対応)』、『消火器の使用法』、『垂直式降下袋の使用法』、『安否確認方法』、『お家に帰ろう！（被災時の帰宅方法）』、『日ごろの備え(災害時準備物品)』、『学内避難マップの作成』、『大学周辺に関する情報を知った上での災害別の対応』、『応急処置』、『緊急時連絡カード』の10項目が抽出された(表1)。

表1. 防災ガイドブックの項目(第3回目話し合い)

項目	内容
おはしも行動マニュアル (被災時の初期対応)	避難時のおはしも/安全確保のための行動マニュアル/ 地震時の自動車運転中の対応/地震に備えての電車の乗り場所など
消火器の使用法	消火器の使用法
垂直式降下袋の使用法	垂直式降下袋の使用法
安否確認方法	大学：大学の安否確認メールの送受信方法 自宅：災害用伝言ダイヤル・災害用音声お届けサービスなどの使用方法
お家に帰ろう！ (被災時の帰宅方法)	災害時の帰宅方法/大学から自宅までの距離と徒歩での所要時間/ 災害時の情報収集方法(テレビ、ラジオ、Twitterなど) / 帰宅時に便利なホームページ一覧など
日ごろの備え (災害時準備物品)	常備物品のリスト(自宅用/携帯用/学内ロッカー用)
学内避難マップ	AEDの設置場所/避難場所/避難場所までの避難経路/ 9号館内の避難方法など
土地に関する知識を知った 上での災害別の対応	火災・地震・水害時の各対応(大学および自宅) / 大学周辺の災害ハザードマップなど
応急処置	止血の方法/骨折の対応/AEDの使用法/搬送方法/ 身近なもので応急手当てに使えるものとその使い方など
緊急時連絡カード	氏名/住所/緊急連絡先など

防災ガイドブックに取り上げる内容については、第2回の話し合いの際に、活動メンバーが各自で災害や防災に関する書籍・他大学の防災マニュアルなどを参考にして、事前に項目を考えることとなっていた。学生メンバーからは上記で示した参考資料以外にも、履修中の講義（教養基礎科目「岐阜学」や「災害と危機管理」）の知識を生かした項目（『大学周辺に関する情報を知った上での災害別の対応』や、防災セミナーで学習した内容に関連した項目（『垂直式避難袋の使用法』、『消火器の使用法』、『学内避難マップの作成』）があがった。

緊急時の連絡について、多くの学生は連絡手段として携帯電話を使用しているため、家族や友人などの電話番号や携帯番号を暗記していないという意見が学生メンバーからあがった。そのため、災害時に携帯電話が使えない、あるいは避難時に携帯電話を持ち出せないといった事態が起きた場合、学生は容易に安否確認が困難になることが想定された。このことから、防災ガイドブック以外にも普段から携帯可能な緊急時連絡先を書いたカードなどがあるとよいという意見が出た。そこで、本活動で緊急時連絡カードと防災ガイドブックを作成することとなった。

第4回

災害時の安否確認方法に関して検討を行った。NTT提供の「災害用伝言ダイヤル」と携帯電話各社が提供している「災害用音声お届けサービス」の体験版を実際に使用し、安否確認方法と学生にとっての活用のしやすさを検討した。検討の結果、一般的に広く普及している「災害用伝言ダイヤル」が、安否情報を発信する側の学生のみでなく、受け取る側の家族にとっても、最も利便性が高いという結論に達した。普段から持ち歩く緊急時連絡カードには、「災害用伝言ダイヤル」の使用法を記載し、裏面に氏名、緊急連絡先などを記載する欄を設けることとした。

第5回

本学で実施された防災総合訓練（震度6の地

震発生を想定）について、意見交換を行った。災害状況のイメージができておらず、移動時に頭を守るといった二次被害を防ぐことに考えが及ばなかった、特に9号館はガラスを使用している箇所が多く、けがをする危険性が高いことを考慮した避難行動を取る必要があるといった意見があった。

第3回の話し合いで抽出した項目について、防災ガイドブックの掲載内容を吟味し、各項目の担当を決め、資料ができ次第、順次、内容の確認を行うこととした。

学生メンバーから、自分自身の安全が守れないと他者を救うことができないのではないかという意見があがった。そこで、まずは自分の安全を守る方策（避難方法や避難経路、垂直式降下袋・消火器の使い方など）を優先して防災ガイドブックに掲載することとした。避難場所と避難経路、AED設置場所や二次災害の危険性のある場所については、学内マップに図示し、緊急時にも一目瞭然で情報が理解できるよう工夫することとなった。さらに使用する学生にとって親しみが持てるよう、学生メンバーがデザインをした防災キャラクターを掲載することとした。

第6回

実際に学内を歩いて、災害時の避難場所と避難経路、災害時に活用可能な物品の設置場所（消火器・消火栓、AED、水道の蛇口、自動販売機、備蓄庫など）、二次災害発生の可能性の高い場所とその内容を確認し、学内マップに記載した。被災したことを想定して大学内を自分の目で確認することで、普段の生活では気づかないガラスや屋根などの落下の危険性や、樹木や電信柱など転倒の可能性など目を向けることができた。避難時に想定される事柄を平常時に充分把握しておくことが、安全な避難行動に結びつくことと理解できた。

第7回

防災ガイドブックに掲載する『日ごろの備え（災害時準備物品）』について、自宅常備品、携

帯品、学内ロッカー常備品、非常用持ち出し物品の4項目に分けて、具体的な内容を提示し、検討した。学内ロッカー常備品は、学生用ロッカーに常備しておくことで、学内で被災した際に活用できる物品を記載した。『大学周辺に関する情報を知った上での災害別の対応』の項目では、地震時と水害時の対応を記載することとなった。また、大学近辺でひとり暮らしをしている学生への情報提供も必要であるとの意見もあり、大学近辺の避難場所や自治体での対策について情報収集を行った。

さらに緊急時連絡カードと防災ガイドブックの配布方法について意見を出し合った。単に配付するだけでは学生は使用しないため、学生の危機管理意識が向上するよう、配付時に震災の映像を流す、緊急時連絡カードはその場で書いて財布に入れてもらうなどの工夫が必要であるとの意見が出た。2016年度前期オリエンテーション時に看護学部の2015年度生と2016年度生に配付し、学生メンバー3名が防災ガイドブック作成の経緯や使用方法などを説明することとなった。

第8回

学生メンバーが考案した緊急時連絡カードについて、記載内容やレイアウトを検討した。表面は自記式で、氏名、住所、電話番号、緊急連絡先(2か所)、血液型(ABO型・RH型)、生年月日、アレルギー、持病、かかりつけ医、自宅近くの避難場所の記載欄を載せ、裏面に災害用伝言ダイヤルの使用方法を載せることとした。

また、防災ガイドブックの形式とページ数を検討した。学生が財布やスケジュール帳に収納して持ち歩け、かつ紛失することのないものとするため、防災ガイドブックの形式は、手のひらサイズで、厚みの少ないじゃばら式のものとする事となった。

業者に印刷を依頼するにあたり、活動メンバーがそれぞれ担当している項目について、具体的内容をA4サイズ1枚で作成することになった(緊急時連絡カードおよび防災ガイドブックの項目は表2を参照のこと)。

第9回

学生メンバーが作成した、緊急時連絡カードの最終レイアウトの確認を行った。防災ガイド

表2. 防災ガイドブック・緊急連絡カードの項目(最終)

項目	内容
おはしも行動マニュアル(地震・洪水・火災)	地震時の行動方法(自宅/大学/電車/繁華街/自家用車運転時)/洪水時の行動方法/火災時の行動方法
消火器・消火栓の使い方 [※]	消火器(粉末ABC消火器)の使い方/消火栓の使い方
防火扉・垂直式降下袋の使い方 [※]	防火扉・シャッターの使い方/垂直式降下袋の使い方・設置場所
安否確認方法(大学編)	大学の安否確認メールの送受信方法
お家に帰ろう!	徒歩帰宅のポイント(状況判断の仕方/大学から自宅までの距離・所要時間(自記式)/帰宅ルート設定/危険場所の回避/帰宅支援ポイントの活用)/災害時の情報収集方法(ラジオ・テレビ・県や市町村の広報/スカイプ/SNSサービス)
日ごろの備え(災害時準備物品)	常備物品チェックリスト(自宅常備品/携帯品/学内ロッカー常備品/非常用持ち出し物品)
学内避難マップ	避難場所・避難経路・AED設置場所・災害時に危険と思われる箇所・二次災害の危険性を学内マップに図示
大学周辺の避難所リスト	大学周辺の避難所リスト(名称、所在地、電話番号、使用室名、適応する災害の種類(洪水、内水・地震・火事・土砂災害など))
緊急時連絡カード	表面(自記式):氏名/住所/電話番号/緊急連絡先(2か所)/血液型(ABO型・RH型)/生年月日/アレルギー/持病/かかりつけ医/自宅近くの避難場所 裏面:災害用伝言ダイヤルの使用方法

※:学内設置物品の使用方法を掲載

ブックに掲載する『おはしも行動マニュアル(被災時の初期対応)』は、大学周辺の土地柄による災害の傾向を考慮し、災害時の対応には火災・地震・水害について掲載することとした。

第10回

印刷業者に印刷資料の作成方法、イラストの作成と挿入方法など不明な点について確認を行った。また、2016年度前期オリエンテーションでの配付を目指した場合の今後のスケジュールや手順を印刷業者に確認した。緊急時連絡カードは2色刷り、防災ガイドブックはカラー刷りで、いずれも両面印刷にすることとなった。

第11回

作成した資料の内容とイラストの最終確認、掲載項目の並び順の確認を行った。学生メンバーから『垂直式降下袋の使用法』について、防災ガイドブックには簡単な使用手順と設置場所を掲載するとともに、具体的な使用手順書を設置場所に置いた方が、緊急時に活用できるとの意見があり、別途に設置資料を作成することとなった。

今回の話し合いには、本学入試課の大学機関紙「和(やわらぎ)」担当者が参加した。2016年春号において、災害に関する特集を組むことを計画していることが説明され、本活動を紙面に取り上げることについて学生メンバーに意思確認を行い、了承を得た。

第12回

第1校の原稿確認を行った。また、2016年度前期オリエンテーション時の防災ガイドブックの配付について検討した。緊急時連絡カードは配付時に学生に記載させること、また配付した緊急時連絡カードおよび防災ガイドブックは、財布やスケジュール帳に挟み、説明直後から持ち歩くように学生メンバーが指示することになった。

今回で活動が終了するため、活動メンバーに活動に対する感想を尋ねた。学生メンバーからは、毎回の活動は楽しく、想像していたより

も大変ではなかったこと、防災ガイドブックは簡単なものを作成すると思っていたが、立派なものが出来上がったこと、話し合いを通じて学生が使いやすいものができあがり、満足であることという感想の他に、今までパンフレットなど作ったことがなかったため、印刷業者と交渉したり、大学機関紙のインタビューを受けるなど、よい勉強の機会となったとの声が聞かれた。さらに、防災に関する学習を通して、物事を見る視点が広がったこと、防災への関心がより深くなったこと、もっと学びたいと思うようになったこと、自分たちで調べて自分たちにとって必要な情報を取捨選択し、さらに他者にわかりやすい言葉で表現することの大切さと難しさを学ぶことができたと言った。

教員のメンバーからは、学生の立場で考えることで新たな視点に気づいたこと、学生メンバーの意見が新鮮で、勉強になったこと、学生と教員が協力しあったからこそ、よいものが仕上がったなどの感想があがった。



図 学生主導で作成した資料3点
(垂直式降下袋の使用法の説明資料(左)、
緊急時連絡カード(右上)、防災ガイドブック(右下))

IV. 考察

今回の活動は、防災ガイドブック作成にあたり、学生に協力を得て、学生の意見や視点を取り入れることで、使用者である学生にとって実用的かつ活用可能な防災ガイドブックを作成することを目的とした。防災ガイドブック作成に参加した3名の学生から、学生ならではの視点で多くの意見が出され、それらは防災ガイドブックの内容に取り入れられた。

例えば、防災ガイドブックの作成では、学生は文章やページ数がたくさんあると読まないこと、冊子にすると本棚に入れてしまい、持ち歩かないため非常時に活用できないこと、災害時に活用できる情報紹介は、HPアドレスの記載では学生は入力が面倒であり、活用しないこと、そのためQRコードや検索ワードを載せたり、該当アプリのアイコンを載せることが効果的であること、学生はスマートフォンアプリのインストール手順は熟知しているため、どのようなサービスがあるかといった情報提供だけで活用可能であることなどである。このような学生メンバーの忌憚のない意見によって、学生が防災ガイドブックを実際に使用することを想定し、普段の生活の中で携帯可能で被災直後から活用できる情報が掲載された防災ガイドブックを作成することができた。

さらに知人との連絡手段は携帯電話であるため、電話番号を暗記しておらず、被災時に携帯電話がなければ安否確認の連絡が取れない可能性が高いといった学生メンバーの意見から、学生の生活事情を考慮し、緊急時連絡カードを作成したことなど、学生メンバーが本活動に参加したことによる本学看護学部の防災教育における功績は、非常に大きいものであった。

全12回の活動を行い、活動メンバーそれぞれが防災に関する知識を深めることができたこと以外に、目的を持って一つのものを他者と協力して作り上げる難しさや楽しさを体験することができたこと、本活動により防災ガイドブックや緊急時連絡カードが作成されたとともに、

大学機関紙への掲載といった自身の活動の成果が具体的に目に見える形となったことによる達成感や充実感、学生と教員という垣根を超えた話し合いから得られた視点は、本活動に参加した学生のみならず教員にも非常に貴重な経験となったと考える。

おわりに

本活動を通して、防災ガイドブック、緊急時連絡カード、垂直式降下袋の使用法の説明資料の3点を作成した。防災ガイドブック、緊急時連絡カードは、2016年度前期オリエンテーションの際に、学生メンバー3名からの説明のもと、2015年度と2016年度に入学した看護学部学生に配付された。垂直式降下袋の使用法の説明資料は、9号館内すべての垂直式降下袋に設置された。

最後に、学生メンバー3名から、自主的に自分たちの在学中は防災ガイドブック、緊急時連絡カードの配付と説明を下級生に行いたいという申し出があった。さらに、自分たちの学年だけでこの活動を終了するのではなく、継続して活動をしていきたいとの意思表示があり、現在は、学生3名で防災に関する自主活動を行っている。

このような立場や学年を超えて、自身の学びと他者の学びを共有し、学習を深めていくことは、本学看護学部の特色のひとつとして掲げている縦の連携であるといえる。学生自らが縦の連携を構築していこうとしている姿を頼もしく思うとともに、今後の学生の更なる成長に期待したい。

謝 辞

防災ガイドブックの作成趣旨をご理解いただき、貴重な意見を提供くださいました学生の加藤祐香さん、川野珠央さん、北川須弥子さんに深く感謝申し上げます。

なお、本研究は平成27年度岐阜聖徳学園大学研究助成により実施した調査の一部である。

引用文献

林和枝, 菊地亜矢子, 中川名帆子他(2016): 看護学部の学生および教員に対する防災教育－防災セミナーと防災に対する意識調査－, 岐阜聖徳学園大学看護学部看護学研究誌, 1, 50-56.

平野美樹子, 藤田和子, 田中富美子(2005): 防災から災害対応へ 災害からの学びを活かした危機管理マニュアル, 看護教育, 46(6), 440-446.

増田恒子, 大橋富士子, 飛鷹初江他(2005): 看護専門学校における「災害時行動マニュアル」

の作成, 看護教育, 46(6), 434-439.

上田ゆみ子, 林和枝, 鈴木寛之他(2013): 看護大学生の災害時対応の実態と対応マニュアルのニーズ, 中部大学生命健康科学研究所紀要, 9, 25-34.

参考文献

岐阜聖徳学園大学(2016): 岐聖大通信「和」(やわらぎ), 第22号.

株式会社幻冬舎エデュケーション(2014): 防災カードゲームシャッフル, 株式会社幻冬舎, 東京.

Key words : Disaster Prevention Guidebook, Nursing Students, Disaster Prevention Education